

の本場です。

小林みつ江さんは、ここ大原で夫、隆雄さんと共に、二五〇アールの茶畑を管理し、茶の生産に取り組んでいます。

茶生産農家にとって、特に忙しい時期は、四月中旬から五月末までの一番茶のころと、六月から七月初めの二番茶のころです。

「朝早く、お茶摘みさんを迎えるに行き、一緒に茶畑に入り、茶摘みをしませす。葉を傷つけないように気を配りながら、手早く摘み取ります。製品五キログラム作るのに生葉を三〇キログラム摘むのです。しかも、摘んで四時間以内に加工にまわさなければ良質のお茶になりません。また、天候も大変影響します。この時期は、時間と天候に追われて寝食を忘れてしまうほどの忙しさです。」と、みつ江さんは言います。八月以降は、茶畑の耕作、施肥、摘芯など、肥培管理に従事します。この管理の仕事が翌年の茶の出来具合を左右するので、とても大切です。このように一年間通して休み間もない小林夫妻にとって、一番の楽しみは、九月に行われる茶品評会です。

夫、隆雄さんは、昭和六十二年の全国品評会以来、三年連続、普通せん茶の部で、農林水産大臣賞

を受賞しています。そして、みつ江さんも、平成元年度の品評会において、農林水産大臣賞を受賞したのです。しかも、みつ江さんが一等一席、隆雄さんが一等五席という、夫婦そろっての輝かしい受賞となったのです。茶の審査は、外観、香気、水色、滋味の四点からなり、みつ江さんは満点で、堂々の受賞でした。

茶販売業を営む家に生まれ、茶の香りの中で育ったみつ江さんは十三代続く茶農家に嫁いで十八年になります。始めは家事と子育てをしながら、仕事を手伝うという生活でしたが、夫の両親が年を経るごとに、体力のいる仕事ができなくなり、いつの間にか、みつ江さんが夫の助手として不可欠の存在となりました。今では、良きパートナーとして、夫婦協力して良質の茶生産に打ち込む毎日です。

二人の娘さんも高二、中三と成長し、特に、長女は、後継者となるべく、浜松の農業経営高校で茶業を勉強しています。みつ江さんは、娘さんと一緒に、「本山茶」の販売店を出すことを楽しみにしています。両親の茶作りの姿勢にいつの間にか、自分もやってみたいと思うようになった長女もいずれ加わり、小林家のチームワークは

より一層強いものとなって、更に良質の茶作りが展開されるものと期待します。

始めたことは実らせたい

朝市から店づくりへ

藤森文江さん
(中川根町)



「四季の里」が中川根町に店開きして四年になります。中川根でなくてはできないものを、また、生産者を大切にして売りたいという「四季の里」の願いが町に根づいてきました。

その願いはどこから生まれ、ど

うはぐまれてきたのでしょうか。「中川根はお茶が主産業ですが、その他にも作物があります。それに、例えばよもぎをとれば、大井川流域でもここのは特に柔らかいと言われます。そんなこの地域ならではの産物を生かしたいし、ここから都会へ出ている人にふるさとの味を届けたいとも思いました。」と藤森さんは言います。

店を持つ前は七年間朝市を続けていました。農協婦人部が中心となり、野菜等を借り集めて並べるのですが、売れ残りの品をどうするかが問題でした。生産者の労力を考えると、「はい返品」などとはとてもできず、車に積んで旅館や給食センターへ売りに行きました。藤森さんたちに、残った品を置ける店が欲しいという願いが話し合われるようになったのは、このなりふりかまわぬ苦勞をいつか生かそうという思いからだったそうです。

いよいよ店を借り、商品を置くことになったとき、朝市の経験から、材料のままより加工した方が保存や価格に有利と知り、加工場も作ることにしました。こうして店づくりに参加した主婦十三名で、有限会社「ふれあい」を設立したのです。加工場「ふれあい」の建

設費はどこからも助成を受けず、平等に出資し、平等に働き、平等に発言するということに徹しました。

「『四季の里』は町に育ててもらっているんですよ」と藤森さんは言います。農協、モア・ラブ、ふれあいグループ等の横のつながりは店の発展に大きな励みとなっているそうです。しかし「四季の里」も産物を買取取るなど町の人に働きかけています。

例えばよもぎの季節。町内に「よもぎ買います」と呼びかけると「四季の里」にはお年寄りや主婦が揃んだよもぎが持ち込まれます。店では採算の取れる精一杯の値で買います。この小遣いを数えながら帰る姿を見るとき、「店をやったよかった」と実感するそうです。

よもぎは「よむぎまんじゅう」に加工されます。ちなみにこの商品名は商品化とともに商標登録を申請しました。二年ほどして周りから商標登録したらどうかと言われたときは許可が下りたところだったとか。運営にはこうした独立歩の心意気があります。

十三名は、四十五歳から六十歳で、今では以前よりも恵まれた働き方ができるといいます。中川根の他の女性グループも化粧水、ジャ

ム、わさび漬、いもがらと製品作りを始めました。今後は多くの人に呼びかけて、商品が安定して供給できる組織作りをするのも「四季の里」の仕事です。

「残された人生をいきいき生きたい」という藤森さんたちは今、「四季の里」を通してその願いを実現しているのです。

主婦の輪を広げて国際交流へ

心のドアを

開けませんか

小松幸子さん

(三島市)



三島市の主婦が中心となって、国や民族、宗教、年齢、性別などあらゆる壁を越えて学び合おうと「グローバル文化交流協会」が発足して四年になります。小松さんは当初からのメンバーで、現在同会が発行している雑誌「D.O.O.R ドア」の編集長としても活発な活動をしています。「D.O.O.R ドア」には、同会で企画した外国人を交えての料理・意見交換・海外研修・ホームステイ・講演会なども紹介されています。

国際交流の魅力に引き込まれていったいきさつについて小松さんは、「学生時代から世界各地の人々と海外文通をしたり、英語の弁論大会にも出ましたが、当時外国は遠い存在でした。主婦として一歳の娘と家にいるようになったころ、たまたま近所に同じくらいの子供を連れて二人の外国人のヤングママが越えて来たのです。食べ物、子育て、生活習慣や考え方の違いがとても新鮮でした。彼女たちに出会って、子供が小さいからとか家庭があるからという理由は、自分のしたいことができな理由にはならないと気付かされました。」と語ってくれました。

小松さんは長女三歳長男一歳の時から六年間ガリ版刷りの家族新

聞「ガリレター幸」を、さらに近所の友人たちと地域のミニ新聞「かわらばん沢地」も発行してきました。こうした身の周りをしっかり見据えた活動が、現在の小松さんの基盤となっているようです。

昭和五十九年の「県家庭婦人海外派遣団」の研修に参加したことで海外がより身近になり、一緒に参加した女性たちが地域で積極的に活躍している様子も刺激になって、PTAや英会話教室で知り合った仲間と「グローバル文化交流協会」を設立させました。

小松さんは現在の活動について「料理が得意な主婦、英語が大好きな人、仲間づくりが上手な人など、それぞれの持ち味を出し合っただけのものではなく、みんなで練り上げて行く過程を大切にしています。取材や催していろいろな人と出会うたびに、『自分はこれいいのか』、『もっとより良く暮らしたい』と思います。」と熱っぽく語ってくれました。

今、「ウオッチング地球」と題して西ドイツ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、トルコに焦点をあて、各国の方々と地域の人々との交流活動を行っています。小松さんの明日は大きく広がっています。

魅力のある女性に なりたい

年を重ねることを減点法で考えず、好奇心を失わず、目的を持ち前向きな生き方をしている先輩女性をみると、素直に素敵な人だなあと思う。そして、そういう人のまわりには自然と人が集まり、互いに刺激し合うよい人間関係が成立するようだ。私もそんな魅力のある女性になりたいなあ。

(二十九歳 主婦)



ウーマン スクランブル

……ちょっとお耳を拝借いたします……

若い女性は先輩をどう見ているのでしょうか

〈家庭で・職場で・クラブ活動で〉

母は 私の良き理解者

母は私が赤ん坊のころからずっと働いています。そんな母は私の良き理解者で、悩みごとを聞いてくれるときも私の立場になって自分の若かったころの話をしてくれず、人生経験の豊富な母の言葉には、いつも勇気付けられます。仕事をもち家事をして子供を育てるといふことは、とても根気がいることだと思います。私もいつかは母のようになれたらいいなと、最近つくづく思うようになりました。

(十九歳 OL)

キャリアを生かす場に 恵まれていないのでは

私の職場ではお手本にしたい先輩女性はいません。皆、仕事に疲れ、口を開けば会社や上司、まわりの人に不満ばかり。だんだん自分もその中に染まっていくようで、時々、恐ろしくなります。でも、それは先輩たちに全部責任があるのではなく、生き生きとすることができる恵まれていないからだと思います。やはり女性の職場、職種には限りがあり、キャリアを生かせる場が少ないのではないのでしょうか。

(二十六歳 OL)

楽しめる何かがなくて かわいそう

離れて暮らしてきて、今まで煩わしく感じていた母の一言一言がもつともであることに気付いた。パートも家事も手際よくマイペースでこなす母を、今では主婦の先輩として素直に尊敬している。ただ、子供たちが大きくなって、これまで働きづめだった母には楽しめる何かがないのでかわいそう。私はああはなりたくないから、夫婦で楽しめることを今のうちから少しずつ捜しておきたい。

(二十五歳 主婦)



やさしい母が大好き

私が子供のころから働いている母は、熱があってもかぜぐらいでは寝込んだことがない。愛情細やかな人なので私はさびしきを感じたことはなかった。結婚して家庭を持ち、その大変さがわかって、一時も体を休めることなく働いている母には、立場を逆にしてのんびり過ごしてもらいたいと思っている。尊敬はもちろんであるし、感謝の気持ちでいっぱい。働き者でやさしい母が大好きである。

(二十七歳 主婦)

年齢の問題ではない

先輩の女性のイメージといって一概には言えない。若い女性に關しても同じことが言えるが、それはすべて人間性であって、年齢の問題ではない。同年代でも先輩女性でも、素敵な人は素敵だと思ふ。若くても、いわゆる「オバタリアン」はたくさんいる。

(二十二歳 学生)



続けているのがいい

母は四十代後半から女たちでカウンセリングの勉強を始め、何年かして仕事へ発展させた。女たちだけで、十年くらいたつ今も続けているのがいい。そして、勉強もレポートを書いたりして、続けているから驚きである。よく勉強の話をしてくれるけど、母は自己流の思

いるのが残念である。広くいろいろな人と接して、柔軟性を持ってほしいと思う。

(三十歳 パート勤務)

甘えを持ちこんで いるのは

最近の女性の地位の向上は目ざましい。能力と勇気を持っている人はいくらでもチャンスがある。この立場を、今までの女性像の甘えた部分を持ち込んで乱用しているのをよくみかける。若い女性にも先輩方にもいえると思うが、もし本当に対等に物事をこなすことができなければ、かわいらしさややさしさも忘れないで今の女性の位置をより良いものにしてほしい。

(二十一歳 学生)

ボランティア活動の 先輩をみて

家事、仕事をこなした上で、活動もしている先輩は、本当にバイタリティーがある。時間の使い方が上手で無駄がないように見える。周りの人との協調性もあり、グループの雰囲気盛り上げていた。いい人生の先輩に巡り会えて、刺激を受けた。

(二十六歳 主婦)

考パターンに落ち込んで、系統性に弱いところがあるのでちょっと甘いと思うときがある。

(二十七歳 OL)

同じような生き方を したくない

おとなしく、やさしい母だが、子供心にも何か気になることがある。感情がこみ上げるとすぐ涙ぐみ、こちらがとまどってしまふ。人間的に何か欠けているような気がした。仕事をする私が今、母にどんな生き方が学べたかふり返っても、母の意見とか生きる姿勢が思い浮かばない。私は母と同じような生き方をしたくない。

(三十一歳 仕事を持つ主婦)

ママさんバレーの先輩を みて

最初は怖そうに見えたけど、本当は気さくでおもしろい人だった。バレーの練習中にだんなさんと子供たちも見に来て、お母さんのプレーを応援したりアドバイスしたりしているのを見て、うらやましいなと思った。

私もああいうさわやかなお母さん、さわやかな夫婦でありたいと思った。

(二十五歳 主婦)

能力がこんなにあるのに

職場で男の人と対等に仕事をして、すばらしいと思っていた主任がいた。共働きでも生き生きしていたのに、姑さんが倒れたときやめてしまった。能力のこんなにある人でもやめるのかとがっかりした。姑さんは二年ほどして亡くなったそうだけど、その先輩は今どんな思いでいるのだろうか。

(二十五歳 OL)

もっと自然に…

仕事はできるけど、人の意見をきかないで仕切ったがる女性先輩。男の人にもそういう人はいるけれど、彼女の服装はスタイルの良さをこれみよがしかつフェミニン好み、女っぽさをみせている感じが不自然である。考え方も常識的で新鮮さがないし、能力の発揮ってもっとにじみでるような自然なものであってほしい。

(二十六歳 OL)

若い女性は先輩女性をよく見ているものです。経験豊かな先輩の姿を自分に照らし合わせ、将来を考えた時、時には反面教師にしてみたり。お互いの立場、意見を尊重した上で、良い関係が築けたらいいですね。

ミニコミ紙編集者の目から見た

静岡の女性

今そして将来

女性の手で、編集、発行されている「女性のための情報誌」が、県内にも多くあります。本誌「ねっとわあく」も、その一つです。

地域の情報誌もあれば、団体の機関誌(会報)、または、女性の文化と生き方を提言するミニコミ誌もあります。発行機関も編集方針も販売及び配布状況も様々ですが、地域での生活発信の役割を持っていることは確かです。

この情報誌の編集者の方々は、取材を通して、多くの静岡の女性たちとコミュニケーションを持ち、「静岡の女性」に関して、積極的な、そして客観的な御意見を持っていることと思います。

そこで、編集者の方々から、静岡の女性へメッセージをいただきました。自分自身の生き方をみつめる参考にしていただけだと思えます。

質問

読者の反応について。地域性、年代による違いがありますか。創刊当初から現在までの流れの中で静岡の女性の状況に変化、問題がありますか。静岡の女性の印象及び期待すること。

DoorDア



編集発行 グローバル文化交流協会ドアドア編集室
編集長 小松幸子・創刊昭61年
・年三回発行・一五〇円
・(〇五五九)八六一五二四
・国際交流、人際交流

Q1 学ぼうという姿勢は、年齢には全く関係ないようです。10代〜70代以上、様々な年代に広がっています。日本語の学習にもなると、外国人の読者もいます。

Q2 余暇を有意義に生かそうとしている女性が増えているように思います。個人的レベルから、更に視野を広げ、関心は地球規模にまで発展しています。

Q3 ひかえめだけれど、黙ってよく見て、よく考えているように思います。学んだことをいつ出すのか、他も認めつつ広い気持ちで共に伸びていきたいものです。

草の指環



編集発行 草の指環編集部
代表 平井和子・創刊昭63年
・年二回発行・四〇〇円
・(〇五五八)七二六七八
・伊豆の文化の再発見、女たちの生き方をさぐる。

Q1 20代、30代の若い主婦層が多いようです。

フェミニストの男性の支持も少しですがあります。

Q2 マドンナ、オバタリアンなど、元気な女性がもてはやされていますが、表面的な流行にのるだけで、真に主体的な「いい女」は、まだまだ少ないようです。

Q3 周囲の反応や評価にばかり気をとられ、自分自身の意見を堂々と主張しない。先頭に立って新しいことをやりたがらない。視野がせまくて、新しい考え方を受け入れられない。

パンの耳



編集発行 女性談話室しずおか
代表 寺田朝子・創刊昭56年
・年三回発行・三八〇円
・(〇五四二)四五五一八二
・学ぼう/話そう/広げよう女性
の輪

Q1 地域性はそうないが、年代による違いがある。年代により求める情報が違う。例えば、「働く」ことの特集の時、若い人には共感をもたれたが、50代以上の方にはあまり興味をもたれなかった。

Q2 発刊当初、社会参加が特異的にみられたが、約10年たった現在、当たり前のことのように思われてきた。しかし、女性グループ同志の横のつながりが薄く、ひろがって大きな力となっていないのは問題である。

Q3 おとなしくて、言わない。かつて沈黙は美德とされていたが、今、決して「金」ではない。自分の意見をしっかりとって、発言して、責任をもっていかなければ!

婦人静岡



編集発行 静岡県地域婦人団体
連絡会 代表 向井喜美
・創刊昭28年・年二回発行・一
五〇円・(〇五四二)五二一〇六
一一・静岡県婦連傘下の婦人活
動公開の場

Q1 県婦連会員は、くまなく目を通し、お互いの活動性をたしかめあっている。既にリーダーの立場を退いている方も、すばらしい記事があった、よい活動ぶりとおほめのことばをよせてくださる。

Q2 戦前、戦中、戦後と幾多の困難の中に育った婦人静岡である。女性に求められる時代の要求は、新しく、はげしく変容を求めていることはたしかであるが、そのスピードには即応できぬもどかしさを感じる。

Q3 風土、生活のゆたかさに安住する事は、大変幸せと思うが、自己のみでなく、女性集団の中にとまり、信頼等になった和づくりをほしい。

ミニコミ誌『ゆに亭』



編集発行 スタジオゆに亭
代表 伊佐治和子・創刊昭60年
・年四回発行・二五〇円
(〇五四二)三七七六七二一

Q1 県内に住む女性にターゲットを当てて誌面創りをしてきた。20代女性の最大の関心は夫と家族づくり、30代は子供の教育、40代半ば以降は自分自身のありかたと社会(友人)とのかわりという気がします。

Q2 静岡のあたりまえの、ごく普通の女たちが何を考え、何に興味を抱いているかを模索してきたが、立ち遅れた性としての女を發揚し、援護しようという発刊当初の視点が色あせてきたかと思える。女も男もない、個性化の時代になってきたと感じている。

Q3 親切で心地よい日々の暮らしを大切にする女性が多い。しかし、そのニュートラルな感性は、保守性に結びつきやすく、ソリッドな姿勢は頑迷をまねきやすいとも思う。夢を育て、夢をかたちにしていこうとするパワーをもちたい。

とんぼのめ



編集発行 磐田市教育委員会
社会教育課・創刊昭60年
年二回発行・(〇五三八)三五
四三二五
・編集はすべて婦人情報ボラン
ティアの手で行われている。

Q1 ふるさと(磐田)の歴史や行事などの記事は、転入者にとっては興味深いものであり、年配者にとっては、なつかしいもののようにです。

Q3 温暖な気候のせいかわ、どうも覇気に欠けるような気がします。

フェミニストサロン

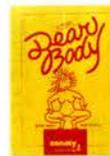


編集発行 浜松婦人懇話会
・創刊昭54年・月一回、二年
に一回雑誌発行
(〇五三四)五六三二三八七

Q2 10年の間に専業主婦・パートとして社会参加を目ざしていた状況から、フルタイム・

パートへと状況の変化があった。今、社会参加した中で、何が問題か問い返す時ではないか。

Q3 慎重で、今のままでよい、仕方がない、と自分から行動することが少ないのでは。静岡の様々な状況が、日本の他の地域と比較してどうか、など批判精神を持ち、より暮らしやすい県にする力を、女性は持ち得ると思います。



ソナティ女性ビジネスレター
年一〜六回発行・創刊昭60年
・女性のためのトレンド性ある
情報誌
おんなニュースホットライン
年五回発行・創刊昭62年
・女性ビジネス交流会の会誌



編集発行 (株)ソナティ・エイト
代表 佐藤和子
(〇五三四)五四二二六二一

Q1 ビジネスに関する広い地域情報がよくこぼれている。例えば、地元の企業の動きには関心が高く、浜松市のまちのビッグ・プロジェクトなどには、特に多くの人たちが関心をもってみている。

Q2 専門的な能力を身につけ、それを生かしてビジネスにしている女性や、企業の中にも仕事のできる女性が続けて長く働くようになり、肩書きのある地位の働き方をするようになったし、企業もそれを認め、活用しているなど、変化している。

Q3 もっと積極的に社会とかわって生きていく女性になってほしい。